



Title	俳句
Author(s)	山田, 平歩
Citation	懷徳. 1937, 15, p. 69-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88984
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和歌

音代 湘園

満州

爾靈山の石に混^{マシ}れる藥莢^{ヤクキヤウ}を子供等拾ひ旅人に賣る（旅順）
駢足で上る爾靈山の石ころ道草いぎれ暑う汗に惱めり（旅順）
いかめしき警乗兵の乗りこめるこの夜行列車の客となりけり（満鐵）
神の世の大森林が石炭^{スミ}に化し今の現^{ウツ}に糧^{カチ}を與ふる（撫順）
道といふ道はあらざり砂ぼこりうづまく荒地ひた走り行く（法輪寺）

俳句

山田 平歩

洞か峠 一句

青 芒 一 鳥 を 見 ぬ 峠 かな

圓福僧堂 四句

無思量によりて涼しき寺の縁
實をつけて萬兩の花咲きにけり

不立文字

放下せよと僧の言ひける涼しさよ
一日不作一日不食

作務了へし僧もどり来る蟬の中

○

曼陀羅の縁起を聞くや春の水
野々宮の御垣に牛や竹の秋
落葉松の林を出でゝ夏の湖
少しばかり刈り残しある刈田かな
瀧の上の紅葉に夕陽残りをり

秋五題

澤 北 斗

白 井 文 溪